

明快な形像

大岡信 『日本の詩歌 その骨組みと素肌』

『オペラ 火の遺言』

長野 隆

批評という行為は意識的にもその中に複数の読者を棲まわせるが、批評が未熟な場合、内なる読者は限りなく自己に同一的であるか未知的である。むしろ批評行為以前に内なる読者のレベルを問うことは避けられない。批評の未熟ではなく、批評に成らない未熟さというものもある。更に現実の読者へ聞き手など



を想定し云々すれば、これは、途方もない。

『日本の詩歌 その骨組みと素肌』は、著者がコレージュ・ド・フランスでの五回講義にあたり、その聴衆へ翻訳を強く意識して書き起こした日本詩歌論である。「聴衆を、何ができるでもわが陣営に引きずりこんでやる、という心がまえで、講義に臨んだ」とあり、いわば翻訳という通路を介した自己再理會を当初から予想して書き進めた講義ノートである。外人向けの日本文化論ならば、むしろ類似品は秘匿して多数出回っている。著者が小声で「日本の人々にまず読んでもらいたい」と添えたのは、そのためか？ 否。声の大きさを誰よりもよく知っているからである。合目的ではあるが凶らずも、といった二重の手応えか。批評の焦点深度に幅と正確を強いた方法が、自ずと思考そのものの深度調整を行い、元ファイルの書きかえを迫ったのである。本書は、そういう新しい認識の存在を信じさせる。モチーフが編み出す形像が、その方法の手つきに見合っ、いかにも明快な輪郭を結んでいるから。これは偶然ではあり得ない。雄弁な勝利宣言である。ついでに言えば、本書に併行して生まれた『オペラ 火の遺言』の形式や構想も、これを代弁する肉声の証言である。併読するのが格好の釣り合いである。

第一章に道真の漢詩、最終章に中世歌謡を

据えたのは戦略であらう。道真の詩には、漢詩形式ゆえに可能となった、社会化された詩の主題の希有な日本の実現が見えるが、これが価値を持ち希有であることは、しかし逆にそこから遠退いて行く和歌の本道と些かも矛盾しないばかりか、寧ろその逆行の系譜上に日本詩歌の素地と肌合いが洗い出される、という具合の弁証のたて方だ。ここで漢詩は、その形式と内容を恰も逆の手つきで日本の特殊性と世界詩的普遍性へ重ね合わされ、寧ろ属性とすべき翻訳的バイパスの方が無駄なく機能する魔法の暗箱である。あくまで合理的かつ本質的に日本詩歌を問い質す巧妙な合理の架設か。それゆえ、日本という風土的・制度的な閉鎖環境が史的に規制した諸々の負性は、その負性ゆえの規矩を言語的に内にはらみ、内臓感覚的・象徴的な世界認識へと抒情の裾野を拓いたという。和歌や歌謡で女性の活躍が著しいのは当然の役回りとなろう。それは意外なほど特異な世界ではない。負は負で、差は差で、宿命はその宿命を内側で生きて、虚無の自由を手にするようだ。単純さと奥行き、集中と放心、無名性と唱和性等々は、たしかにこの国の女たちの、というより「へうた」がもつ、性的美徳に似ている。

（講談社 95年11月刊・16000円）
（朝日新聞社 95年11月刊・18000円）